

# 新キャンパス事情

浜岡 政好

一、最近の大学改革論で気になること

このところ教育論議が花盛りである。しかし、何かが欠けているようで気になってしかたがない。例えば、臨教審での大学論は共通一次などの入試論へ傾斜しすぎているように思われる。そこでは入学後の大学における教育・研究の内容がほとんど不問に付されている。また昨今の私立大学における改革論議も、昭和六十七年以降の十八歳人口の減少期のサバイバル作戦の色彩が極めて濃厚であり、激烈な私学間競争を生き延びるための諸方策が、はたしてどこまで国民の教育と研究への期待に応えたものになるか大いに疑問である。

このため、現代社会において大学はどうあるべきか、今日、教育と研究に何が求められているか、教育・研究の質的向上のためには何が必要なのか、などと言った最も基本的であり、重要な事柄が、当面の事態や課題への対応ということで改革論からネグレクトされ

ているように思われる。

しかし、いまの改革論議に必要なのは、このような基本的視点にたつて私立大学の現状を見直すこと、つまり、今日私大が提供している教育・研究の質と量についての実態、その下での教師・研究者と学生の状況、そしてそこでの教育・研究活動が真理の探求や国民の要請にいかん貢献できているか、などについてのしっかりとした現況把握であろう。

最近の改革論議に一番欠落しているのは、このような視点からの冷静な現状把握であり、とりわけ、当事者たる学生及び教師・研究者の研究・教育の実態がほとんど無視ないし考慮されていないことである。

もし真の大学の危機があるとすれば、大学間競争の激化の中で、大学人がこうした状況への自己認識を欠落させることであるといえないであろうか。

センセイショナルな大学危機論の横行と派手な化粧直しの大学改革論のかまびすしい議論の中で、今日の大学を建て直すには地道な研究・教育活動の大道をしつかりと前進させる以外に道はないという、極めて当たり前のことが忘却されてはいないか。

二、今日の大学と学生の教育・研究の実態

そこで、まず大学を成り立たせている重要な構成部分である学生の教育・研究実態との関連で、今日の大学、とりわけ私立大学が差し迫って解決を迫られている課題を二つだけとりあげてみよう。（なお、ここで使用するデータは、佛教大学学生部がこの間実施してきた『学生生活実態調査』によるものである。）

第一は物的・制度的教育環境の整備の方向性とそのテンポについてである。学生の存在しない大学が考えられないとすれば、学生の要望がすべてではないにしても、学生の求める大学像について一定の配慮をほらうことは当然であろう。現在の学生は大学に何を求めてやって来ているのであろうか。

五十九年度調査によれば、専門的な知識・技術の修得三〇・七％、豊かな教養・人格の陶冶三〇・五％、資格の取得・有利な職業に就職二五・六％、青春をエンジョイ二二・二％、学問研究を通じて真理の探求八・二％となっている。専門性と教養への期待は依然として根強い。そしてそれらを就職に結び付けたいという希望もある。これも昔からあまり

変わらないといつていいだろう。特徴は青春のエンジョイの比率の高さと学問研究の比率の低さとも読めるかもしれない。しかし本音でいえば、昔もこの程度だったといえなくもない。

だから戦後型大学が売り物としてきた専門主義、教養主義が現在の学生にもすっかりと受容されているとみたほうがよいだろう。建前論としての学問研究はひとまずおくとしても、売り物の専門性、教養主義がはたしてどの程度、学生の期待に応えるものになっているか、まずこのことについての大学の側からの反省が必要である。学生の求める専門性などの実績をあげるためにいかなる条件整備がなされてきたのか。

この点で学生の大学への要望は、本学の条件整備の現段階をよく反映している。彼等の要望度の高いものは、第一にキャンパスの拡大、そして以下、課外活動・諸施設の拡充、カリキュラムの改革、教育諸施設の充実、教授陣の充実などとなっている。特に上回生での比率が高くなっているのは、カリキュラム、教育諸施設、教授陣に対する要望である。これらの要望は前述の専門性及教養教育

などへの学生の期待との関連で早急に改善していくことが望まれる。

第二は、物的諸施設や制度の改革とともに、教師の教育への取組みの改革もまた待たれているということである。学生の授業への出席はほとんど出席が二三・〇％、大部分出席が四〇・一％、出たり出なかったりが三〇・五％となっており、それほど悪くはない。しかし授業への満足度は高くない。どの授業にも満足はわずかに三・七％で、半々六七・〇％、すべての授業に不満一四・七％である。たしかに何の準備もなしに授業に臨む学生が多く、そのことが授業内容への理解を困難にさせていることは否めない。

ちなみに、一日の学習時間(授業出席時間や試験期間中の勉強は除く)は、ほとんどせう五八・一％、約一時間二六・一％、二時間以上一四・四％となっており、年々学習時間は減少傾向にある。また課外活動時間とアルバイトは年々増大してきている。アルバイトと課外活動の間をぬって授業にだけは出席、というのが実情であるといってもよい。しかし、そうであるとしても、「知識の切り売り、形式的な講義をやめ、講義内容を充

実してほしい」(三六・七％)、「学生と個人的な接触・対話の場をもってほしい」(三二・八％)、「研究者であるとともに良き教育者であってほしい」(二九・七％)、「実社会に役立つ講義内容を取り入れてほしい」(一九・〇％)、「学力に相応した平易な授業内容も考えてほしい」(一六・〇％)などという学生の教師への要望を、無視する理由にはならない。学生の学習意欲の低下を嘆くだけでは解決にはならない。とりわけ教育条件の厳しい我々私大の教師集団にはこのような学生の実態をふまえた教育活動の展開がより一層求められているといえよう。

私学の厳しい財政事情があるとしても、不要不急の支出をさけ、まず第一に学生にとって学習できる教育環境を整備することであり、充実した教育内容の提供であることは言うまでもないであろう。これらの課題を一步一步解決していくことが、大学改革でなくてはならない。

その意味で、佛教大学の現況は学生にとっても我々教師にとってもやりがいのある課題が山積している。苦しくもあるが、楽しみもまた多い。(はまおか まさよし 社会学部教授)